

2 人の視聴者間の人間関係が 動画コンテンツの評価に与える影響

岡明日香[†] 片寄晴弘[‡] 風井浩志[‡]

[†] 関西学院大学理工学部

1 はじめに

人は映像を見ることによってさまざまな感情が喚起される。楽しい映像を見れば楽しい気分になり、悲しい映像を見れば悲しい気分になるだろう。しかし、性別や性格特性により映像を見ることによって喚起される感情やその度合いには違いが見られる [5]。さらに、喚起される感情の度合いは、映像を視聴しているときの、他者の存在も影響すると考えられる [4]。すなわち、他者がそばにいる場合といない場合や、そばにいる他者が親しい人かそうでない人なのかによっても、喚起される感情や度合いは変わってくるのではないかと考えられる。

そこで、本研究では動画コンテンツを用いて、喚起される感情について、他者の存在や、その他者との親密度及び性別が、どれくらい喚起する感情に影響を及ぼすのかを、明らかにすることを目的とする。本実験では、新密度や性別の違いによる結果の違いを明らかにするために、被験者をカップルに限定して実験を行った。

2 実験

被験者：カップル 9 組 (男性 9 名・女性 9 名)、被験者のカップルと初対面である男性 9 名・女性 9 名、平均年齢 20.75 歳、年齢幅 18-24 歳。

刺激：感情を喚起すると思われる動画コンテンツ 3 ジャンル (エロティック・ほのぼの・驚愕) × 3 本ずつの合計 9 本 (各映像は 60 秒前後)。動画コンテンツは、映画の一部やオリジナルで作成されたものを使用した。

手続き: 実験は、カップル (男女 2 人組) と、カップルと初対面である男性 1 人・女性 1 人の 4 人 1 組で実験を行った。対人関係の要因として、(1) カップルで見る条件、(2) 初対面同士の男女で見る条件、(3) 一人で見

る条件、の 3 水準を設定した。各条件を行う順序は、順序効果をなくすために、各組毎にランダムに行った。

動画の視聴を始める前に自己概念測定尺度 [3]、情動的共感尺度 [2] の 2 種類の質問紙を用いて自己評価をさせた。これは被験者の性格の違いが、結果に影響を与える可能性があると考えたためである。また、初対面の男女で実験を行う際に、相手の印象を特性形容詞尺度 [1] を用いて評価させた。被験者は、各動画コンテンツの前後に 30 秒間呈示される注視点を、安静状態で注視するように求められた (図 1)。注視点が消失した後に、約 60 秒間の動画コンテンツが呈示された。動画コンテンツのジャンルの視聴順序は、順序効果をなくすために被験者毎にランダムにした。エロティック動画とは、キスシーンや官能的な描写があるものと定義し、ほのぼの動画とは、動物や子供が描写されているものと定義し、驚愕動画とは、暴力的・グロテスクなシーンや恐怖をあおる描写があるものと定義する。

1 本の動画コンテンツを視聴し終わる毎に、13 項目 (興味・嫌悪・楽しみ・怒り・驚き・満足・悲しみ・幸福・恐怖・不安・官能的・恥じた・いらだった) の感情毎に、両端を「全く感じない」、「非常に感じる」とした 10cm の VAS (Visual Analogue Scale) によって、主観的に感じた程度を評定させた。評定結果に対して、「性別 (2) × 対人関係 (3)」の要因計画として、分散分析による統計解析を行った。

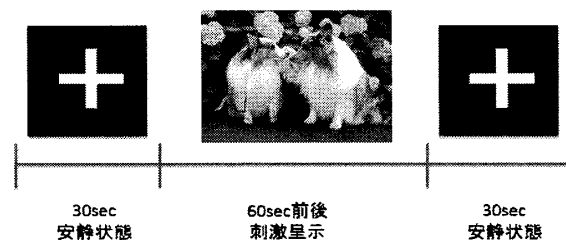


図 1: 1 試行の流れ

The influence that human relations between two audiences give the evaluation of animation contents
Asuka OKA[†], Haruhiro KATAYOSE[‡] and Koji KAZAI[‡]
[†]Science and Technology, Kwansei Gakuin University

03460}@kwansei.ac.jp

3 結果

全ての質問項目において、「性別 (2) × 対人関係 (3)」の要因計画では「性別」の効果が認められなかった。そこで、男女差は存在しないとみなし、「対人関係 (3)」のみの要因計画として、分散分析を行った。一人で見る条件を S、カップルで見る条件を C、他人と見る条件を T として、質問項目 13 項目を動画ジャンル 3 ジャンルにおいて、分散分析を行ったのち、各動画ジャンル及び質問項目毎に、S-C、S-T、C-T の 3 つの条件の組み合わせにおいて t 検定を行った。

その結果有意確率 ($\alpha < .05$) で、エロティック動画に関して、質問項目 13 項目中『恥じた』の 1 項目で、S-C、S-T、C-T の組み合わせ全てにおいて、有意差が見られた。また、『興味・満足・楽しみ』といったポジティブな質問項目において、T よりも S、S よりも C の方が、質問項目に対する評価が高かった。『恥じた』という項目においては、S よりも T、T よりも C の方が評価が高かった。ほのぼの動画に関して、『幸福』という質問項目について、S よりも T、T よりも C の方が評価が高かった。驚愕動画に関して、質問項目 13 項目中『興味・幸福・不安』の 3 項目で、S-C、S-T、C-T の組み合わせ全てにおいて、有意差が見られた。また、『悲しみ・恐怖・不安』といったネガティブな質問項目において、C が S や T よりも評価が高かった。『興味』の項目は C よりも S、S よりも T の方が評価が高かった。(図 2、図 3、図 4)

また、映像のジャンルに関わらず、項目『興味』において S-T 間、項目『幸福』において S-C、S-T、C-T の組み合わせ全てにおいて、有意差が見られた。

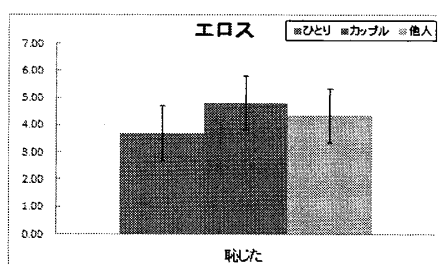


図 2: 実験の結果

4 おわりに

今回の実験で、エロス動画において、他人と見た場合の方が恥ずかしいといった感情の評価が高いように考えていたが、実際は『恥じた・官能的』といった項目について、カップルで見た方が評価が高かった。ほのぼのの動画においてカップルで見た場合が『幸福・楽しみ』といった、ほのぼのの動画によって喚起されると推測さ

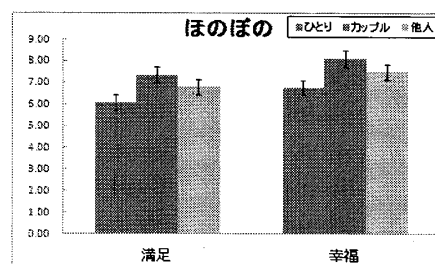


図 3: 実験の結果

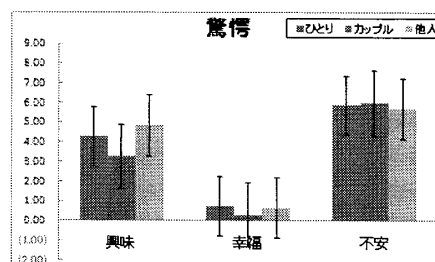


図 4: 実験の結果

れる感情の評価が高いことがわかった。驚愕動画において、『嫌悪・驚き』といった喚起されると推測される感情について、どのような条件で見た場合でも、喚起される感情の度合いは大して差が出なかった。今回の研究結果から、コンテンツの情動的内容によって人間関係が異なるとコンテンツ評価に影響が出ることが示された。今後の課題として『笑い』などの他の情動的内容に対する人間関係の影響を検討することが考えられる。

参考文献

- [1] 林文俊. 対人認知構造における個人差の測定 (1): 認知的複雑性の測度についての予備的検討. 名古屋大学教育学部紀要 23, 1976.
- [2] 加藤隆勝, 高木秀明. 青年期における情動的共感性の特質. 筑波大学心理学研究 2, 1980.
- [3] 長島貞夫, 藤原慶悦, 原野広太郎, 斉藤耕二, 堀洋道. 自我と適応の関係についての研究 2. 東京教育大学教育学部紀要 13, 1967.
- [4] 立平起子, 大森慈子. 他者の存在が環境音に対する印象に与える影響. 仁愛大学研究紀 7, 2008.
- [5] 友田貴子. 映像が感情の生起に与える影響について: ムードの喚起と心理的特性との関連. 埼玉工業大学人間社会学部紀要 5, 2005.